

文法化とレトリック

斉藤 渉

0. 序論

文法化 (grammaticalization)¹ という語が研究分野の名称として使われたのは、比較的最近のことである²。当然、研究そのものは歴史言語学の枠内でも行なわれていたが³、近年見られる急速な発展の一要因として認知言語学の影響があげられよう。とりわけ注目に値するのが、文法化を動機づけるものとしてメタファーやメトニミーと同様の (あるいは類似した) 認知プロセスを想定するアプローチである⁴。

認知言語学による先行理論への批判は、ラング / パロール、共時態 / 通時態、言語能力 / 言語運用、音韻論 / 形態論 / 統語論などのさまざまな階層構造や要素を峻別し、ともすればその区別を固定化してしまう傾向に向けられていた。文法化がこのような階層や要素のうち同時に複数のものと関係する現象だとするならば、従来の傾向が文法化研究にとってむしろ不利に働いたことは想像に難くない。

一方、言語だけでなく知覚や思考や行為一般に共通の認知プロセスを想定する認知言語学は、この想定が有効であることを多くの領域で示してきた。メタファーやメトニミーなどの現象が、言語研究の周辺領域のように見られがちであった修辞学 (rhetoric) の枠組を越え、今や中心的テーマの一つとなっているのもその一例である。これらの現象が、すでに出来あがった文法や語彙にもとづきつつ、それらを通常とは異なった仕方ですら「修辞的装飾」として用いることだと考えられているかぎり、メタファーやメトニミーの根底にある認知プロセスを文法化の理解に役立てようという発想も生まれにくかったに違いない。その意味で、認知言語学以降、文法化研究に認知プロセスの知見を適用するというアプローチが出てきたことは、むしろ当然の流れだったと言える。

¹ 「内容語 (動詞や名詞など語彙的内容を持つ要素) が機能語 (語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など) に通時的に変化すること」(辻編 (2002), 231:「文法化」)。認知言語学との関係については、同書の関連項目を参照されたい。

² この用語は、Meillet (1948 [1912]) に由来するとされる。文法化の研究史 (およびその前史) については、Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991a), 5-23、Hopper / Traugott (1993), 18-31 を参照。なお、Diewald (1997), vii は研究興隆の先駆的存在として Lehmann (1995 [1982]) を挙げている。

³ 例えば、文法化研究の前史として、W. v. Humboldt の講演『文法形式の成立とそれが観念の発展に与える影響について』(1822) がしばしば挙げられる (cf. Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991a), 6f., Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991b), 150, Hopper / Traugott (1993), 18f., Diewald (1997), 6)。フンボルトの理論的文脈については、斉藤 (2001), 67-87 を参照。

⁴ Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991a), 27-64, Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991b), Traugott / König (1991), Hopper / Traugott (1993), 75-93, Diewald (1997), 42-63などを参照。なお、文法化とメタファーとの比較は、すでにフンボルトにも見られる。Cf. 斉藤 (2001), 83。

では、認知的アプローチは文法化研究にどのような成果をもたらすのか？ また、そこにはどのような問題があるだろうか？ 本稿ではまず、(1)文法化研究における認知的アプローチをメタファーとメトニミーに即して見た上で、(2)しばしば議論される希薄化 (bleaching) の問題に触れ、最後に(3)このアプローチの基本的想定 問題解決 (problem solving) としての文法化 を考察する。

1. メタファーとメトニミー

1-1. メタファー

まず、次の2つの文における「ところ」という語の用法を比較してみよう。

- (1) a. ここは貴重品を預けるところです。
- b. 一緒にテレビを見ているところです。
- c. 今から大学に行くところです。

(1) a の「ところ」は、本来の空間的意味で使われており、「場所」に置き換え可能であるが、b や c の場合、そのような置き換えは不可能である。それでも b はまだ、現在の状況をその「場」に定位して述べているのに対して、c では、「今から」という語句が共起していることからわかるように、時間的ないしアスペクト的意味がより強まっている。これは説明のための例であり、a から c に向かう歴史的推移があったことを主張するものではないが、そのような想定も十分可能であろう。つまり、本来は空間的な意味をもつ名詞が時間的な意味を表すべくメタフォリカルに転用されたと考えることができる。通常、(1) b c のような用法は形式名詞と呼ばれるが、この名称自体、名詞のもつ語彙的内容 (今の例で言えば「場所」) が希薄になって、機能語に近づいていることを示すものである。今日では接続詞化している「ところが」や「ところで」についても同様の説明が可能であろう。

これだけのことなら別段新しい話ではないが、ここで例文 (1) b c を、エウエ語 (アフリカ西部) の次の例文と比較してみよう⁵。

- (2) a. *me le yi-yi gé* (I be going intentional)
 'I am about to go, I intend to go'
- b. **me le yi-yí gbé* (I be go-go-nominalization area/place)
 'I am at the place/area of going'

(2) a は「私は行こうとしています」を意味するが、その起源として (2) b のような文が想定される。〈意図〉を示す文末の *gé* は、「場所」を意味する *gbé* に由来するものであった。つまり、「私は行くところです」とまったく同じ構造をもっている。エウエ語と日本語の間に

⁵ 例文および解釈は、Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991b), 182 n. 13 による。

いかなる影響関係もないとすれば、この一致は偶然の所産ということになりそうである。だが、認知的アプローチによれば、この2つの現象はまったく同じメタファー化のプロセス、しかも最もありふれた部類の認知プロセスとして説明される。

Heine / Claudi / Hünemeyer (1991a, 1991b) は、Lakoff / Johnson (1980) の提出した概念的メタファー (conceptual metaphor)⁶ の考え方にならって、カテゴリー的メタファー (categorical metaphor) という概念を導入し、それらの関係を次のような系列として図示している⁷。

(3) PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITY

いずれの場合も、より右にあるものが、より左にあるものとしてメタフォリカルに表現され、例えば、上に述べた現象の場合、TIME IS SPACE の一事例となる。それだけではない。空間を表わす前置詞が時間を表わすのに用いられたり⁸、空間移動を表わす動詞が未来を表わすのに用いられたりする現象⁹も、これと同じ認知プロセスによって説明可能となる。つまり、カテゴリー的メタファーという想定は、(a) さまざまな言語において、(b) さまざまな品詞の間で生じる文法化の現象にシステムティックな解釈を提供してくれる。実際、文法化理論の主張する重要な論点の一つは、一般的な認知プロセスにもとづく (3) のような方向があらゆる言語と文化にわたって共通のものであり、したがってまた文法化のプロセスが常にこの方向にのみ進むという単方向性 (unidirectionality) の仮説である¹⁰。

しかし、これらの現象は本当にメタファーと呼びうるものなのだろうか？ 文法化研究がとりあげるのは主としてすでに慣用的に定着している表現であり、定着する以前にその表現がもっていた意味合いは想像するのが難しい。例えば、(1)c の「ところ」を「場所」に置き換えた (4) のような文は、ほとんどの日本語母語話者が不適切だと見なすだろう。

(4) *今から大学に行く場所です。

だが仮に、誰かが (例えば日本語学習歴が浅いエウエ語母語話者が) このような文を産出した場合、そして発話状況から (1)c と同様の意図が推測される場合、メタファー (つまり、空間的語彙を時間的意味に転用したもの) というより、むしろ「誤用」として理解されるのではないだろうか？ メタファーの成立には、「字義通りに解釈すれば偽となる」点がしばし

⁶ 例えば、ARGUMENT IS WAR という概念的メタファーは、‘Your claims are *indefensible*.’, ‘I’ve never won an argument with him.’ などの表現として現れる。Lakoff / Johnson (1980), 4f. によれば、我々はこのような言語表現を行なうだけでなく、現実には議論を戦いのように理解し、体験し、実践しているという。

⁷ Cf. Heine / Claudi / Hünemeyer (1991a), 48, Heine / Claudi / Hünemeyer (1991b), 157. 概念的メタファーとカテゴリー的メタファーの違いについては、Heine / Claudi / Hünemeyer (1991a), 50f. を参照。

⁸ しばしばそのような前置詞自体が身体部位を表す名詞に由来している。その場合、OBJECT > SPACE という転移が先行したことになる。

⁹ 英語の be going to + *inf.* は文法化研究で取り上げられる典型例である。この例については、Heine / Claudi / Hünemeyer (1991a), 46f. を参照。

¹⁰ 単方向性仮説については、Hopper / Traugott (1993), 94-129, 辻編 (2002), 151 を参照。なお、提案される系列にはさまざまなものがあり、(3) はその一例に過ぎない。

ばあげられる。山梨 (1988) の用語を用いれば、これは発話の主部・述部間に生じた「選択制限の違反」、あるいはより一般的に、発話の基本的な機能の不成立に求められる。発話の機能を、i) 表現機能、ii) 命題機能 (a: 言及機能、b: 叙述機能)、iii) 遂行機能、に分けるならば、ほとんどのメタファーは、ii-b の叙述機能 (= 言語表現が言及する存在に対して何らかの叙述をする機能) の不成立によって特徴づけられる¹¹。だが、(4) のような発話の場合、むしろ表現機能 (= 文ないしその一部としての言語表現を発する機能) が十全に成立していないと考えるべきであろう。

たしかにこの場合でも、(4) が (1)c の意味で解釈される可能性は高いが、その理解は少なくとも通常のメタファー理解とは異なったものとなるように思われる。重要なのは、発話者の側で仮にメタファー的認知プロセスが作用していたとしても、それがメタフォリカルなものとして認知されるとは限らないという点である。

1-2. メトニミー

文法化現象を動機づけるものとして想定されるのはメタファーだけでない。それと相補的なものとして、多くの研究者がメトニミー的認知プロセスをあげている。ここではもともと同時性を表わした表現が譲歩や対照を表わすようになる例を見てみよう。

(5) It is midnight and Mary is still working.¹²

この文の前半と後半は同時に成立している 2 つの事態を表わしている。世界には同時に成立している事態など無限にあるわけだが、話し手 (ないし書き手) はこの 2 つの事態をわざわざ並列し、この並列に注意を向けるために同時性を示す *and* という語まで付加している。多くの聞き手 (ないし読み手) はそこに何らかの発話意図を読み込み、例えば、次のように補完して理解するだろう ([] の中は聞き手の補完した部分を表わす)

(6) 今は真夜中だ。そして [真夜中に仕事をするのは普通ではないが、にもかかわらず]
メアリーはまだ仕事している。 [よくないことだ / 立派なことだ, etc.]

最後の部分は、真夜中に仕事することを聞き手がどのように評価しているかに大きく依存すると思われる。いずれにせよ、文の前半と後半を結ぶ *and* には、単に字義通りの意味を越えて、話し手が意図していたであろう内容を読み込んでいると言ってよい。こうして読み込まれた内容を、Hopper / Traugott (1993) は、会話的含意 (conversational implicature) と呼ぶ。会話的含意は、多くの場合、発話の文脈や会話の参加者という特定の状況に強く依存するが、頻繁に繰り返される場合、慣習的含意 (conventional implicature) となりうる¹³。(6) に示したように、会話的含意は発話の字義的意味に直接含まれるものではないので発話外的と見なし

¹¹ 山梨 (1988), 20-26 を参照。

¹² この例は、Traugott / König (1991), 200 による。

¹³ Cf. Hopper / Traugott (1993), 72-75.

うのに対して、慣習的含意はなかば発話内に定着したものと言える。

このように会話的含意が慣習化していくというプロセスは、英語の接続詞 *while* が、同時に加えて譲歩や対照を意味するに至った際にも作用していたと考えられる¹⁴。今日でも *while* は名詞としての用法を残しているが、接続詞の用法も名詞起源であり、OE: *þa hwile þe* ('at the time that') のような構造に由来する¹⁵。図式的に示せば、次のようになろう。

- (7) a. p であるその同じ時に q
b. p である一方で / であるのに対して / であるのに q

(7) a のような文において、 p と q が通常は同時に成立しにくい事柄である場合、(7) b に例示したような会話的含意が成り立つが、この含意が慣習的・語用論的に強化されていくことにより、ついには (7) a と (7) b の両者が並存することになったと考えられる。

当初は発話外的であった含意が慣習化された含意として発話内に読み込まれたのだとすれば、発話外的含意を含む全体的状況が発話内のある部分(今の場合なら *while*)によって表示されたと見なしうる。このような観点に立てば、上述のプロセスの性質がメトニミー的のものであると言えるであろう¹⁶。事実、文法化理論はメトニミー的認知プロセスを想定している。だが、メタファーの場合と同様、ここでもメトニミーはどちらかといえば非プロトタイプの事例と言わなければならない。それは研究者たちの用語法からも見てとれる。例えば、Traugott / König (1991) はメトニミー概念の拡張を提案をしているし¹⁷、他の論者たちも典型的なメトニミーとの差異を示すため、文脈誘発的再解釈 (context-induced reinterpretation: CIR)、概念的メトニミー (conceptual metonymy) などの用語を導入している¹⁸。

2. 希薄化

認知的アプローチには、文法化の多様な現象を統一的視点からシステムティックに説明できるという利点がある。しかし、そこにまったく疑問の余地がないわけではない。ここでは、しばしば議論となる希薄化 (bleaching)¹⁹の問題をとりあげよう。

¹⁴ 以下の議論は、Traugott / König (1991), 199-201, Hopper / Traugott (1993), 84-86 にもとづく。

¹⁵ ほぼ同様の構造に起源をもつドイツ語の *weil* は、譲歩ではなく理由の意味をもつようになった。Cf. Diewald (1997), 56f.

¹⁶ 換喩のモデルを日本語の文法現象に適用したものと、西村 (2002) を参照。

¹⁷ Traugott / König (1991), 211.

¹⁸ CIR については、Heine / Claudi / Hünemeyer (1991a), 71f., Heine / Claudi / Hünemeyer (1991b), 165、概念的メトニミーについては、Hopper / Traugott (1993), 81 を参照。後者は「概念的連想 (conceptual association)」とも言い換えられている。

¹⁹ 漂白化あるいは単にブリーチングと呼ぶこともある。辻編 (2002), 46: 「文法化の過程のうち、本来の具体的な内容を持つ語彙の意味が抽象化・一般化していく意味変化を指して言う。語形の短縮を伴うことが一般的である。」

語彙的要素が文法化する際に当初の意味が希薄化するという見方は古くからある²⁰。しかし、この希薄化という考え方に対して文法化の研究者はおおむね批判的である。もちろん、すぐ後に見るように、この名前と呼ばれているような現象が実際に生じうることを認めないわけではない。だがそれは、テンスやモダリティや節の関係といった抽象的・一般的意味を獲得していくことと裏表の関係にあり、希薄化という呼称は一方の側面のみを不当に強調してしまう。このことを指摘する点で、文法化の理論家たちはほぼ一致している。たしかにこれは正当な指摘だと言ってよい。しかし、希薄化概念に対する批判にはもう一つの意味があるように思われる。それは、言語現象のさまざまな局面に一般的な認知プロセスによる動機づけを見出し、ここから言語現象を理解しようという意図、言い換えれば、これまでの言語観を規定してきた恣意性の観点から言語現象を解放しようとする意図である。

例えば、Traugott / König (1991) は、希薄化が不適当な概念だと主張する Sweetser (1988) に依拠して、「通時的文法化の初期段階における意味論・語用論のプロセスを理解しようとするなら、希薄化と文法化は切り離して考えなければならない」と述べている²¹。同様の見地から、Hopper / Traugott (1993) は自分たちの見解を次のように説明する。「読者も気づかれたように、我々は本章において語用論的豊富化、強化などの言葉を用いてきた。それは我々が、文法化の結果というより、文法化の開始点、言い換えれば、プロセスの開始を可能にするような動機づけを論じてきたからである。言うまでもなく、時が経てば、文法化の過程で意味は弱まる傾向にある。だが、初期段階がそろって示すのは、当初見られるのは意味の損失ではなく、意味の再分配ないし推移だということである。」²²

ここに見られるのは、いわば文法化の二段階説である。第一段階においては、認知的動機づけによる文法化のプロセスが開始されるが、この段階は新たな文法的意味の獲得・増加によって特徴づけられる。いわゆる希薄化の現象は、本質的には文法化のプロセスが完了した第二段階で見られる、偶然的・副次的結果に過ぎないことになる。だが、このような二段階説とはやや趣きの違う説明を、ほかならぬ Hopper / Traugott (1993) に見ることができる。すなわち、前節(1-2)で見た *þa hwile þe > while* という過程について、最初の指示詞 (*þa*) が脱落して同時性の表示が薄れた結果、会話的推論(含意)の機能する余地が生まれたとしている²³。もしこの説明が正しいとすれば、メタファーやメトニミーが機能するに先立って何らかの希薄化が起こりうること、また、上の二段階説とは逆の順序で、この希薄化こそがメタファーやメトニミーを作動させるということも想定できるのではないか？

さらに、メタファーやメトニミーが作用したとは想像し難い現象として、動詞の人称変化

²⁰ この点についても、斉藤 (2001), 83 を参照。

²¹ Traugott / König (1991), 190. 傍点は引用者による。Cf. Diwald (1997), 51f.

²² Hopper / Traugott (1993), 87f. 傍点は引用者による。同様の主張は、*ibid.* 68, 93 にも見られる。

²³ Cf. Hopper / Traugott (1993), 85.

語尾体系の発生を考えてみる。今日見られる大半の言語の人称語尾は、歴史的資料を欠くためその起源を確定できなくなっているが、しばしば人称代名詞と語尾の間に規則的対応関係が見られるいくつかの言語から、代名詞が接尾辞化し、ついには動詞と形態論的に癒合したというモデルが想定されている。一例としてブリヤート語の人称語尾体系を見てみよう。

表 1: ブリヤート語の代名詞と動詞語尾²⁴

	代名詞	動詞語尾
1 人称単数	bi	-b
1 人称複数	ši	-š
2 人称単数	bide	-bdi
2 人称複数	ta	-t

もし上の想定どおり、語尾の起源が代名詞にあるとすると、これらの語尾がもつに至った意味は代名詞が当初からもっていた人称の表示にほかならないのだから、メタファーであれ、メトニミーであれ、意味の推移が生じたとは言えないはずである。他の時制との関係から、ゼロ標記として現在時制を表わすなどの可能性もありうるが、それはむしろ、希薄化の後で初めて生じた文法化として説明しうる。

3. 「問題解決」

メタファーやメトニミーを手がかりとした近年の研究は、文法化のプロセスが、限られた表現手段でさまざまな内容を表現するという、一種の問題解決 (problem solving) だと想定している²⁵。これに対し、ラテン語からロマンス諸語に至る文法化を論じた Klausenburger (2000) は、“見えざる手”論法 (“invisible hand” explanation) なるものを紹介し、アダム・スミスの『国富論』に見られる有名な議論「個々人は公共の利益を促進する意図をもたず、自己の利益と公共の利益の関係について何も知らないが、にもがかわらず、結果的には公共の利益が促進されるとする議論」を踏まえて、文法化現象の説明にこの議論が適用可能であることを示唆している²⁶。

²⁴ Hopper / Traugott (1993), 131 より転載。ただし表 1 は、Comrie (1980), 88 にもとづくもの。なお、Hopper / Traugott (1993), 135-138 が紹介するポーランド語の事例も参照。

²⁵ Cf. Heine / Claudi / Hünnemeyer (1991a), 150f., Hopper / Traugott (1993), 66f., 86f.; Diewald (1997), 47 n. 2.

²⁶ Klausenburger (2000), 131-137、特に ibid. 133f. を参照。ここでは、自然現象、人造物と区別された「第三種の現象」を“見えざる手”論法の被説明項とする Keller の議論が紹介されている。これはフンボルトが、カントの『判断力批判』に依拠しつつ、言語を有機的なものと見なした議論とほぼ同型のものと言ってよい。斉藤 (2001), 129-142 参照。ただし Klausenburger は、文法化理論の基本的主張をおおむね認める立場をとっている。

問題解決という視点から見ると、文法化は基本的に目的志向的なものとして現れる。それは、言語現象を人間の認知という目的志向的活動から理解しようとするアプローチにとって当然の帰結であろう。“見えざる手”論法が興味深いのは、仮にこの前提をとった場合でも、総体としての結果が必ずしも目的志向的だとは限らない可能性を示唆する点である。言うまでもなく、文法化のように複雑な現象の場合、確実なことを述べるには多くの実証的研究が必要であるが、それだけに、可能な解釈モデルの範囲を狭めないことが求められよう。

Bibliography

- Comrie, Bernard (1980): Morphology and word order reconstruction: problems and prospects, in: J. Fisiak (ed.): Historical morphology. The Hague (Mouton): 1980, 83-96.
- Diewald, Gabriele (1997): Grammatikalisierung. Eine Einführung in Sein und Werden grammatischer Formen. Tübingen (Max Niemeyer): 1997.
- Heine, Bernd / Ulrike Claudi / Friederike Hünemeyer (1991a): Grammaticalization. A conceptual framework. Chicago / London (University of Chicago Press): 1991.
- Heine, Bernd / Ulrike Claudi / Friederike Hünemeyer (1991b): From cognition to grammar – evidence from African languages, in: Traugott / Heine (1991), 149-187.
- Hopper, Paul J. / Elizabeth Closs Traugott (1993): Grammaticalization. Cambridge (Cambridge Univ. Press): 1993.
- Keller, Rudi (1994): On Language Change. The invisible hand in language. London / New York (Routledge): 1994.
- Klausenburger, Jurgen (2000): Grammaticalization. Studies in Latin and Romance morphosyntax. Amsterdam / Philadelphia (John Benjamins): 2000.
- Lakoff, Geroge / Mark Johnson (1980): Metaphors we live by. Chicago / London (University of Chicago Press): 1980.
- Lehmann, Christian (1995 [1982]): Thoughts on grammaticalization. München et al. (Lincom Europa): 1995.
- Meillet, Antoine (1948 [1912]): L'évolution des formes grammaticales, in: A. Meillet: Linguistique historique et linguistique générale. Paris (Champion): 1948, 130-148.
- 西村義樹 (2002): 換喩と文法現象、in: 西村編: 認知言語学 I: 事象構造 . 東京大学出版会 2002, 285-311 .
- 斉藤渉 (2001): フンボルトの言語研究 . 有機体としての言語 . 京都大学学術出版会 2001 .
- Sweetser, Eve (1988): Grammaticalization and semantic bleaching, in: Berkeley Linguistics Society, Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting, 1988, 389-405.
- Traugott, Elizabeth Closs / Ekkehard König (1991): The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited, in: Traugott / Heine (1991), 189-218.
- Traugott, Elizabeth Closs / Bernd Heine (eds.) (1991): Approaches to grammaticalization. Vol. I: Focus on theoretical and methodological issues. Amsterdam / Philadelphia (John Benjamins): 1991.
- 辻幸夫編 (2002): 認知言語学キーワード事典 . 研究社 2002 .
- 山梨正明 (1988): 比喩と理解 . 東京大学出版会 1988 .